

研究者と巡るセメント美術

美術史研究者 坂口英伸

No.12 竹筋コンクリート彫刻

2022（令和4）年のNHK大河ドラマ「鎌倉殿の13人」に登場した畠山重忠（1164-1205）。鎌倉幕府の有力御家人で、武勇の誉れ高く、その清廉潔白な人柄から「坂東武士の鑑」と称されたという。畠山重忠の竹筋コンクリート彫刻を見るために（図1および2）、筆者は東上線の武蔵嵐山駅（埼玉県比企郡嵐山町）に降り立った。同像が所在する菅谷館跡（国指定史跡）は、重忠が居住した地と伝わる。二ノ郭の土塁の上に建つその像は、1929（昭和4）年に完成し、2011（平成23）年度に嵐山町の文化財に指定された。同像は鎧兜で武装せず平服、しかも鎌倉の方角を向いているようだ。嵐山町教育委員会によれば、勇猛果敢な武将であったにもかかわらず、同像が鎧や甲冑をまとうず平服であるのは、重忠に鎌倉幕府への謀反の意思がないことを示す意図が込められているのだという。

同像の造立は東京の駒込に住む儒学者・小柳通義の発意による。重忠の熱烈な崇拝者だった小柳は、自ら熱心に建造に従事し、嵐山町の有力者の山岸徳太郎から用地の提供を取り付け（現在は町有地）、平服で鎌倉を臨む姿は宮崎貞吉（菅谷小学校長）の提案、像は鋳造家の浅井定吉（正山）、碑文の撰文並びに書を小柳自身が担当することで重忠像は1929（昭和4）年に完成した。

数多くのセメント彫刻を目にしてきた筆者だが、竹筋コンクリート造の彫刻は初めて見た。前回の記事で紹介したセメント梵鐘のように、戦時期の金属不足が原因で、鉄筋の代用として竹筋が選定されたのだろうと考えたが、この推察は外れたようだ。重忠像の制作は第二次世界大戦前の昭和4年であり、時期は金属供出にはまだ早い。昭和4年といえば帝都復興の一年前、当時は関東大震災後の帝都建築を背景に鉄筋コンクリートブームがまだ続いていた時期だ。その時期にあえて竹筋コンクリートを選んだ関係者の意図は不明だが、記念すべき人物として重忠像を後世に永く伝えようと考えたはずである。彫像や記念碑の制作には、このような永年の保存の意図が含まれる。記念碑におけるこの記念性は、「戦争の期間中に持ちこたえればよい」という考えのもとに、短い製品ライフサイクルを想定して設計する戦時設計とは対極の考え方である。そもそも重忠像の建造時期が戦時中でもなく、もちろん重忠像は戦時設計に該当しない。

世界の発明王のトーマス・エジソンによる白熱電球の実用化において、京都府の岩清水八幡宮付近の真竹が耐久性と適度な細さから最適なフィラメント素材として選定されたことに明らかのように、竹とは不思議な存在である。嵐山町教育委員会によれば、重忠像の建造時の写真が同委員会に残されており、その写真で竹筋を目視できるという。竹は古くより土壁の割竹材として利用されるなど、建造物や建築物の強度を上げる心材であった。戦前における竹筋コンクリートの科学的研究は大正期に始まり、大正期から昭和初期にかけて竹筋を使

用した建造物が試験的に作られ、内務省技手の河村協が著した『竹筋コンクリート』（1941年）によって大成されたとされるが、重忠像はその最初期の作例に位置づけられよう。

像を手掛けた浅井定吉は1903（明治36）年に東京美術学校（東京芸術大学の前身）に入学して鑄造を学び、1910（明治43）年に研究科（鑄造）を卒業した。鑄造家の手掛けた彫刻という点でも重忠像は珍しい。竹筋コンクリート造である点や現存作品であるという点でも重忠像は稀有である。像の表面に後世の修復痕を確認したが、重忠像は比較的良い状態に保たれている。

「鎌倉殿の13人」では中川大志さんが演じる重忠が壮絶な最期を遂げ、インターネット上では重忠の死を悼む「重忠ロス」が広がった。筆者が現地で重忠像を取材している最中も次々と観光客が訪れ、重忠像を楽しそうに見学していた。さまざまな意味で畠山重忠に注目が集まっている。竹筋コンクリート彫刻を見るべく、いざ武蔵嵐山。



図1 畠山重忠のコンクリート彫刻の全景



図2 平服姿の畠山重忠